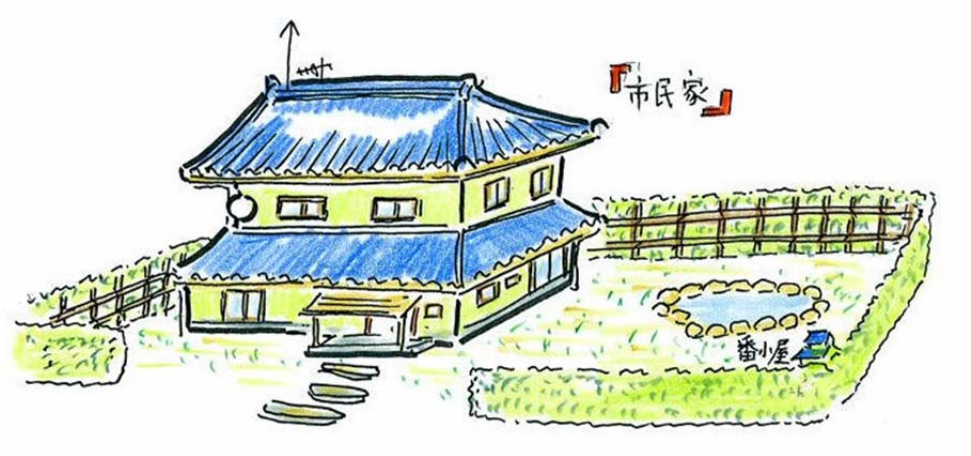
支援くんの火災予防奮闘記

これまでのあらすじ

物語を読む前にまずご覧ください。

物語の主人公 支援くんは「市民家」の火災予防を司る妖精です。



仕事は家来の中間 ご助と共に、「市民家」の火災予防の点検を行うことですが、まじめな支援くんに比べ、あまり仕事熱心ではないご助の点検はいつも問題ばかりで、時に大きな事故まで起こしてしまいます。

そんなご助に手を焼きながら、点検を行う支援くんたちの姿は、普通の人には見えない筈なのですが、今年５歳になる市民家の長女 援(えん)ちゃん には何故か二人の姿が見えるようになったのでした。

点得(てんとく)幼稚園の年中さんの援ちゃんは、二人と遊ぶのがだぁーい好き！

援ちゃんの好奇心が大きな事件を引き起こすこともあります。

ご助と援ちゃんに振り回され、苦労の絶えない支援くんの『火災予防奮闘記』

をどうぞご覧ください。

<u>主な登場人物</u>

援ちゃん　5歳

支援くん　　ご助（中間）

ミーちゃん（飼い猫）

ママ

パパ

閻魔様

支援くんの火災予防奮闘記

～火災を起こさないために～

Vol.25

さて、今回は支援様の『中間（ちゅうげん）』、ご助からのお話ですじゃ。

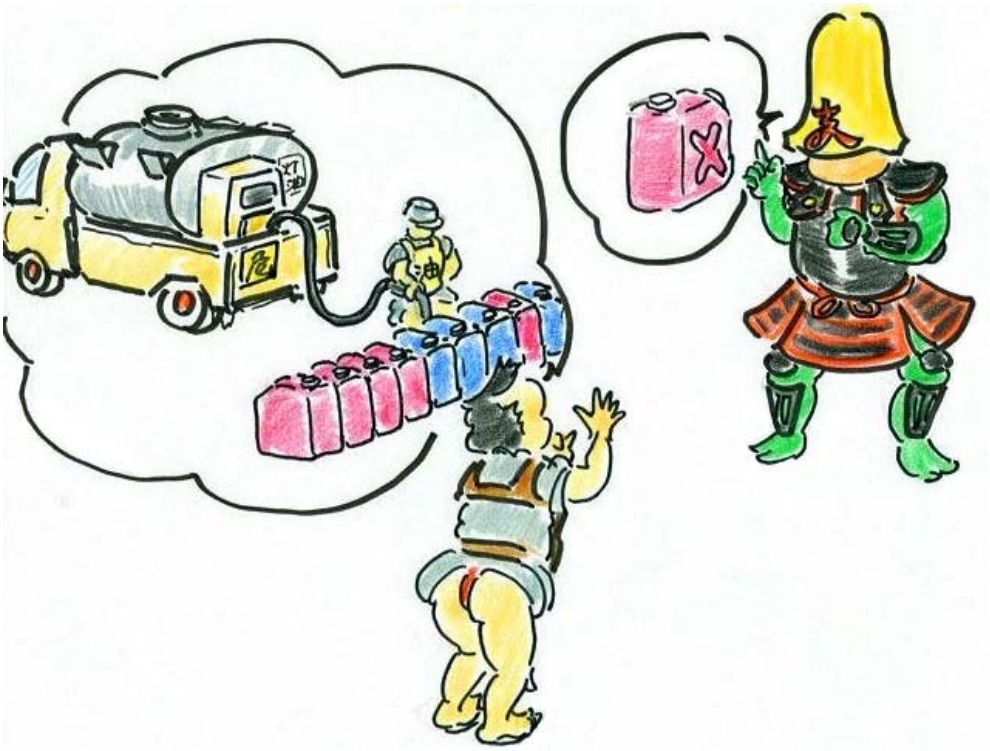
あれは師走の金曜日でござった。

朝から手足が凍えるばかりの冷たい風が吹き、これはいよいよ雪が降るのではと思い巡らしておりましたが、夕方となりとうとう白いものが落ちはじめましてな。

そんなとき、

「おお、寒いの、ご助。ストーブの油は大丈夫かの？明日は土曜で灯油の配達はしてくれんぞ。」とストーブの燃料を気にかけられた旦那様が声を掛けてまいられましてな。

「へい、旦那様。この前の配達の時にポリタンク 12 缶を満タンにしておきましたので大丈夫でさ。」とお答えしましたのじゃ。



「おお、そうか。では大丈夫じゃ・・が？・・ご助よ、今、ポリタンク 12 缶と申したか？それはいかんじゃろ。12 缶以上（人類換算の２００ℓか？）の買

い置きには少量危険物の届け出と標識の設置に消火器もいるんじゃと申したではないか。」とおっしゃられましてな。

「い、いや、あっし（私）の勘違いですぜ、旦那様。ろ、６缶でした。６缶。」とあっしが慌てて言い直しますと安心した旦那様は、

「おお、そうか６缶もあるなら大丈夫じゃな。」と座敷の方へと向かわれましたのじゃ。

その旦那様を見送りましてから、あっしは大慌てで納屋へと向かいましたんでさ。

「そ、そうじゃった、そうじゃった。春先に12缶入れようとして旦那様に叱られ6缶しか入れられなかったんじゃ！」と独り言を口にしながら駆け込んだ納屋には、12缶のポリタンクが整然と並んでおりましたが、空っぽのポリタンクを端に除けると、残りは最後の1缶に僅かばかり・・・

「た、大変じゃ！これでは土日は乗りきれん！」そう悟ったあっしは、思い出せるだけの油問屋に片端から電話を掛けたのでございますが、どこのお店（たな）からの返事も同じで

「ああん？配達？ダメダメ、この週末の忙しいときに何を寝ぼけたことを」と一向に相手にされませんでしたのじゃ。

そうこうしております内に番小屋の方から

「おーいご助、座敷のストーブのタンクに灯油を足してくれんか。」と、旦那様のお声が

「へ、へーい、ただいま。」と答えるとあっしは座敷に向かい、旦那様からタンクを受け取ると、納屋へと駆け戻ってまいりましたのじゃ。

あっしはこれまでの失敗をつらつらと思い出しながら

「これは如何したものか・・・ご助一生の不覚・・・いや二生の・・・あな、三生の・・・もう十生の不覚・・・」　と反省しておったのですが、

「ええい、切りがないわい！」と腹をくくり納屋の奥へと目を向けますと、片隅に立てかけられた草刈り機と、傍らの土間に置かれた金属製の赤いタンクが目に留まったのですじゃ。

「こ、これは旦那様の草刈り機と燃料タンクではないか、こ、これじゃ！」と、あっしは赤い燃料タンクを持ちあげてみたのですじゃ。

燃料タンクのズシリと重い感触に

「ま、満タンじゃ。これなら月曜まで持つかも知れん！」と欣喜雀躍（きんきじゃくやく）（意：躍り上がる程嬉しい様）しながら燃料タンクの蓋を開けるとストーブのタンクに注いだのですじゃ。

トクトクトク・・・と半透明の管の中を赤い油が勢いよく流れるのを見ながら

「な、なんじゃら古い油じゃのぉ。それに匂いも普通の灯油とは違うが・・・。まあ旦那様の座敷で使うんじゃ、あっしには関係ねえこったな。」と、言いながら一杯になったタンクを持って旦那様にお渡ししたのじゃ。

「おお済まぬの。また一段と冷えて来たの。どれ、さっそく点けてみるかの。」と旦那様が点火レバーを押したのじゃった。

ポ、ポ、ポ、ポッ、ポポッ、と何時にない音を立てながらストーブの炎が上り始め

「おお凄いの。こんなに大きな炎が上がって凄く暖かいではないか。」と旦那様は大喜びじゃった。

「おっ、でも流石にこれは大きくなりすぎじゃの・・・」と旦那様がストーブの芯を下げたのじゃが一向に炎は小さくならず、さらに大きくなっていったのですじゃ。

「な、なんじゃこれはっ？ご、ご助っ、おのれは何を入れたのじゃ！！」と旦那様。

ストーブの炎を背にいただき、立ち尽くす旦那様のお姿は不動明王もかくあらん。

　あっしは大河ドラマ『独眼竜政宗』で、若き梵天丸が不動明王を前に

「梵天丸もかくありたい。」と、のたまうシーンを思い出しておりましたのじゃが・・・。

ハッと我に返ったあっしが

「だ、旦那様の草刈り機の燃料を！」と申し上げますと

「な、何いぃ？あの赤いタンクの油を入れたのかっ？」と旦那様。

「へ、へぇ。」とお答えしますと旦那様は

「ば、馬鹿者っ！あれはガソリンじゃぞっ」と叫ばれましたのじゃ。

「ガ、ガ、ガ、ガ・・・」と驚きで言葉の出ないあっしに

「何でも良いからストーブに被せるもの持ってこい。それとバケツに水じゃ！」

と。

　旦那様の怒声にあっしは寝室の布団を持ち出すと、次に風呂場へ向かい浴槽に溜め置いた水を汲みだし旦那様にお渡ししたのじゃ。

　旦那様はあっしから布団を受け取るとあっしに向かって

「下がっておれ。」と言うや燃え盛るストーブに布団をかけ、続けて

「ご助、今じゃ、水を掛けよっ」と申されたのじゃ。

　それからあっしは風呂場と座敷を行き来し、バケツで水を掛け続けましたのじゃ。

格闘すること十数分・・・。

「ご助。もうよかろう。」と旦那様が申された時にはストーブの炎はすっかり消えておりもうした。

「や、やりましたな旦那様。消えましたぜ。あっしらの勝利ですな！」

と申し上げましたところ

「何が勝利じゃこのボケナスがっ！」と、今度は旦那様の怒りが再燃いたしましてな、

思わずあっしは手にしたバケツの水を旦那様に掛けてしまったのですじゃ。

「な、何をする。おのれというやつはっ！も、もう許さんっ」と、旦那様に追いかけられ番小屋中を逃げ回っておるうちに冬の短い日は暮れていったのですじゃ。

そして夜。

あっしは今日の防火日誌を仕上げておりました。

『ストーブの異常燃焼には慌てず大きな布団などで覆い、水を掛けて窒息と冷却により消火すべし。』としたためようとするのですが、寒くてなかなか書けませなんだ。

それもその筈で

間違ってガソリンを入れたストーブは使うわけにはいかず、残ったストーブやファンヒーターも灯油が底をついてしまいましたのじゃ。

更に悪いことには布団まで濡らしてしまい寝るに寝られぬ始末。

寒さで垂れる洟(はな)をすすりながら、あっしは旦那様の布団に潜り込んで寝ようとしたのですが、旦那様もさるもの、あっしの行動を予測しておったのでしょうな。

いつになく晩御飯に大量のサツマイモを食しておられたと思ったら・・・・あっしが布団の端を持ち上げた途端　『ぷううううん』　と、派手な一発を

おかげで気を失ったあっしは、寒さも感じることなく深い眠りについたのですじゃ。

（おわり）